

# 翁

(能)

シテ 宝生 和英

面箱 山田 讓二

三番叟 炭 光太郎

千歳 木谷 哲也

大鼓 亀井 洋佑  
小鼓 住駒 俊介  
小鼓 住駒 充彦  
小鼓 河原 清  
笛 室石 和夫

狂言後見 能村 祐丞  
荒井 亮吉

後見 佐野 由於  
佐野 玄宜

地謡 酒井 章  
山崎 健 渡邊 茂人  
田屋 邦夫 渡邊 荀之助  
松本 博 藪 俊彦  
弘宜

休憩 二十分

# 宝の槌

(狂言)

果報者 炭

哲男

太郎冠者 清水 宗治  
すっぱ 能村 祐丞

後見 若生 敏郎

(能)

シテ 島村 明宏

守 ワキ 平木 豊男

白頭

間 中尾 史生

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 麦谷 暁夫  
小鼓 住駒 幸英 笛 高島 敏彦

# 野

後見 広島 克栄  
藪 克徳

地謡 寺田 茂 高橋 憲正  
谷 清士 佐野 由於  
船本 嘉人 高橋 右任  
岩井 嘉樹 佐野 玄宜

能 翁 (おきな)

老体の神による祝福の歌舞で、古くは〈父尉〉を省略せず、〈式三番〉と呼びました。神聖な晴れの催しや正月に演じられます。幕が上がって、面箱持ち(狂言方)・翁(シテ方)・千歳(同)・三番叟(狂言方)、そして雛子方ほかの諸役が登場し、翁の前で面が箱から出されるのを待って着座します。笛や小鼓三丁の雛子とともに、翁は「とうとうたたり」と千代の幸せを祈る祝言を謡います。次に千歳が「鳴るは滝の水」を謡い舞って、千年の栄えをことほぎます。この間に翁は白式尉の面を掛け、神となって三番叟に向き合い、そばに参ろうと上機嫌です。やがて正面を向いた翁は、袖を大きく広げて、天下泰平国土安穩を祈祷し、莊重な翁舞を舞います。面を外した翁(と千歳)が退場したあと、雛子に大鼓が加わって、喜びを逃すまいという三番叟による揉ノ段、黒式尉の面を掛けた三番叟と面箱持ちによる問答の後、鈴を受け取った三番叟が鈴ノ段を舞って終わります。

狂 言 宝の槌 (たからのつち)

主人の言い付けで宝を買いに都へ出た太郎冠者、「宝買います」と呼ばれるうちに、宝屋を名のるすつばが近づき、古い太鼓の撥を見せて、昔為朝が持ち帰った蓬萊の島の宝の一つ、打ち出の小槌と偽って、万疋で売り付けます。怪しげな呪文を教わり、脇差(すつば所持の物)を出して見せられた太郎冠者はすっかり信じて、帰館後主人の希望で馬を出そうとしますがもちろん失敗。苦し紛れに呪文に掛けて主人の繁栄を予祝し、喜ばれます。

能 野 守 (のもり) 白 頭 (しろがしら)

大峰葛城をめざす羽黒山の山伏(ワキ)が、和州春日の里で野守の老人(前シテ)に出会い、由緒ありげな水のいわれを尋ねます。老人は野守の鏡という名の由来を、老人のような野守が姿を映すからとも、まことは昔鬼神が持った鏡ともいうと教えます。鬼は昼は人の姿で野守を守り、夜は鬼となつて塚に住んだとか。老人は昔の自分を懐かしみ、「はし鷹の野守の鏡」の故事も語ります。それは野守が鷹狩りの帝と言葉を交わし、面目を施した思い出です。鬼が持つまことの鏡は見るのも恐ろしかろうと言い、老人は塚の中へ入ってしまいます(中入)。山伏は法力を頼み、鬼が持つ鏡を見たいと全力で祈ります。すると火花の散り輝く大鏡を持って鬼神(後シテ)が現れます。山伏は鏡を正視できず、恐れながらも、鬼神を引き留めて祈祷を続けます。山伏の行徳に引かれた鬼神は、無限の宇宙と罪罰のすべてを映し出す鏡の威徳を示した末に、鏡を山伏に与え大地を踏み破って奈落の底へ帰ります。

小書がつくと塚の作り物を出さず、シテは幕へ中入します。後シテは常の赤頭を白頭にし、装束も変わります。地謡が終わり太鼓の留撥が打たれた後も雛子の手配りが残り、それが終わるのに合わせてシテは足を留めます(残り留)。

(西村 聡)

次月の予定 令和三年二月七日(日)午後一時始

(能) 蟻 通

(狂言) 節 分

(能) 俊成忠度